

上田紀行

日本型
の
下
の
鉄馬しゅばえん

自分自身を
生きるために



上田紀行 (うえだのりゆき)

1958年東京生まれ。スリランカでの宗教、医療人類学的研究のほか、「癒し」の視点から現代社会の諸問題にも積極的に発言。テレビなどのメディアでも活躍する。愛媛大学助教授を経て、1996年4月より東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授として「文理を融合し、新しい価値の創造を目指す」新設大学院で教える。著書に、「覚醒のネットワーク」(カタツムリ社、講談社+ α 文庫)、「宗教クライシス」(岩波書店)、「癒しの時代をひらく」(法藏館)など。

日本型システムの終焉

自分自身を生きるために

1998年4月10日 初版第1刷発行

著 者 上 田 紀 行

発行者 西村七兵衛

発行所 株式会社 法 藏 館

京都市下京区正面通烏丸東入

電 話 075(343)5656

振 替 01070-3-2743

©1998 Noriyuki Ueda 印刷 亜細亜印刷 製本 協栄製本

ISBN4-8318-7234-2 C1036

Printed in Japan

はじめに

日本がおかしい。

誰もがそう感じている。何かが狂ってしまったのではないか。

この数年間この国に起こった出来事は、どれも警告信号を発し続けている。この国の経済的な下部構造の脆弱さ（ぜいじやく）を明るみに出した、バブルの崩壊から住専問題、自己破産、金融不安に至る財政問題。医者が患者に死のワクチンを投与し、官僚がそれを隠した、薬害エイズ事件。プラックボックス化し、暴走を止められない科学技術の限界をまざまざと見せた、もんじゅの事故や動燃の対応。社会的に見てもそこそこのエリートたちが、「自己と世界の解放のために」猛毒のサリンを撒いた、オウム真理教事件。いじめが頻発する教育の現場では、中学生による連続殺人事件が起こり、学校内で教師を刺殺するという事件がそれに続いた。

何かがおかしい。それはもうはつきりしている。しかし、いったい何がおかしいのだろうか。それらの事件が、対症療法で解決すると思っている人はもはやいないだろう。おかしくなっているのは、日本社会のシステムそのもの、日本型システムの根幹に関わる部分なのである。

本書が明らかにしたいのは、われわれが属しているこの日本型システムの何が狂ってしまったのかということである。そのシステムによって、われわれは何を得、何を失ってしまったのか。そのシステムはどこから間違い始めたのか。

われわれはそのシステムにあまりに深く埋め込まれているので、その存在をなかなか見通すことができない。それは家族関係や親子関係を通じて幼少時からわれわれの心に深く浸透し、公教育によって増幅される。またそれは心の問題だけではなく、社会経済的なハードなシステムにも裏打ちされている、極めて強力なシステムである。

そのシステムが機能していた時代はあった。しかし今や、その旧来の日本型システムは機能不全に陥っている。新しいシステムの原理が求められているのである。筆者自身、東京工業大学に創設された文理融合を目指す大学院の「価値システム専攻」と称する専攻に所属しているが、新たな価値のシステム、社会のシステムが、今ほど必要とされている時代はない。心直し、世直しが今こそ必要なのだ。

神戸の小学生殺害事件における「透明な存在」から、本書は出発する。しかしその議論はとうてい教育という分野に収まるものではなく、日本社会の諸相に及ぶことになる。そして最終章で、日本型システムが何を目指し、何を犠牲にしてきたのか、そこに潜在する構造はいかなるものなのかを論じたい。

日本社会の変革のために、そしてわれわれの解放のために、本書は書かれている。

初出一覧

I

透明な存在の異常と日常（『中央公論』一九九七年九月号、中央公論社、原題「透明な存在」の異常と日常）
学校というシステム（『論座』一九九五年四月号、朝日新聞社、原題「スリランカの悪魔祓いに学ぶ」）
二つの世界のはざままで（『窓』第一九号、一九九四年四月、窓社、原題「元氣の出る文化人類学」）

II

生命と現代文明（『毎日新聞』一九九六年四月六日、毎日新聞社）
沖繩の現実、沖繩の夢（大学教師の賃金格差（『デジタルコラムマガジン』、一九九五年九月二二日）一九九七年三月二〇日、PCIVAN、連載名「世界を癒す」）
教授の権力（書き下ろし）

車内で世界を俯瞰する（書き下ろし）

ストーリー現象の意味（『毎日新聞』一九九六年二月一五日、毎日新聞社、原題「自分のなかの「不気味な他者」癒しの地（『サントリークォーター』第五二号、一九九六年七月、サントリー株式会社）

こころの産業（現代の世相①色と欲、一九九六年十月、小学館）

III

平成の坊っちゃん（『えひめ雑誌』一九九四年九月～一九九六年三月、愛媛新聞社、連載名「上田紀行の神出鬼没」エヒメというシステム（『えひめ雑誌』一九九六年六月号、愛媛新聞社、原題「権威に弱い愛媛の人々」）

IV

癒しブームの虚と実（『読売新聞』一九九七年一月一三日、読売新聞社、原題「癒し型社会」への脱皮、「産経新聞」一九九七年三月二九日、産経新聞社、原題「癒しブーム」と癒されたい人々、に加筆）

日本型システムを超えて（書き下ろし）

はじめに i

I 洗脳教育からの脱出

透明な存在の異常と日常

現代日本の慢性病 4

「透明な存在」とは何か 6

「癒されない子どもたち」の悲劇 9

学校化する社会 11

悪のファンタジー 14

事件が投げかけたメッセージ 16

学校というシステム

教室という異常な場 20

癒しのフィールドワーク 22

いじめを助長する社会システム 23

二つの世界のはざままで

教室の違和感 27

変な講義をする 30

洗脳教育からの脱出 34

II 現代日本のフィールドワーク

現代日本のフィールドワーク

生命と現代文明 38

沖縄の現実、沖縄の夢 41

「共生」の罠 44

すすんで捨てていく勇氣 46

バリで考えたこと 49

ホテル・ニッコー・バリの愚挙 52

素晴らしき「公務員住宅」 54

上海という「異界」 58

「東洋のベニス」―蘇州の今 60

トランスパーソナルの成熟 63

三大テノールという花火大会 66

このごろの若者ときたら！ 70

追記・教授の権力 73

「聖人」モハメド・アリの点火 75

カーナビは車ぎらいへの福音だ 78

追記・車内で世界を俯瞰する 81

「わかりやすい」政治くらいは目指してくれ 82

人生はハカナシ 85

小手先の政見放送は末期的だ 88

政治家のオーラと夢のエネルギー 92

臓器移植球団 95

「貧困」なる官僚はどこへ行く 97

「日本人は幸せじゃない」と語る留学生たち

100

癒しの民主主義

104

カリフォルニアは脳天気か

106

どこもかしこも工事中

109

大学教師の賃金格差

112

ストーカー現象の意味

116

癒しの地

119

こころの産業

「自分探し」の産業

124

自己啓発セミナーのシステム

126

セミナーは宗教か

128

何が彼らを変えたのか

129

こころの産業のトリック

130

セミナーの二つの仕掛け

133

勧誘マシンの現実 136

セミナーが売るもの 138

こころの産業の販売戦略 140

システム社会の最大の問題 142

III 平成の坊っちゃん

平成の坊っちゃん—愛媛日記 94—96— 146

松山で悪魔祓い師になる 自分の意見のない学生たち

ぼくの講義要目

呪われた場所「松山空港通り」 文句を言わない風土

震災のボランティア

イア 「天国」と「地獄」 共産主義国家 授業中のくしやみは三回まで

鴻上尚史氏の愛媛攻撃 「七三一部隊展」の衝撃 教養部への鎮魂歌

温泉街の「ローソン」 さようなら、松山

エヒメというシステム

馬の耳に念仏 172

意欲をそぐ大学 174

「サティアン」のような教育 177

愛媛への提言 179

IV 日本型システムを超えて

「癒しブーム」の虚と実

癒しが暴力に転化するとき 184

これからの「癒し」に何が必要か 186

日本型システムを超えて

システムが人間の存在感を破壊する 188

若者をめぐる危機感 191

癒しの転回点 194

しがらみを断ち切る 198

効率至上の「場の論理」 201

〈個〉の確立をさまたげるシステム 207

透明な日本とアダルト・チルドレン 212

「在ること」自体に意味がある 217

自動機械だった自分自身の帰結 223

効率性の戦場にいた母 226

ぼく自身の癒しと回復 230

〈個〉としての自信を回復せよ 233

根源的な癒しとは何か 237

あとがき

242

日本型システムの終焉

自分自身を生きるために

装幀・渡辺和雄

I 洗脳教育からの脱出

透明な存在の異常と日常

現代日本の慢性病

神戸の小学生殺害事件が大きな波紋を投げかけている。逮捕された少年の犯行であるとすれば、中学生が通り魔的な殺人を犯した後に、知り合いの小学生を殺害し、その首を切断して自分の通っていた中学校の正門の前に置くという、あまりに衝撃的かつ、酷い事件というほかはない。

この事件をめぐる、新聞、雑誌、テレビ等、マスコミはこぞって報道合戦を演じ、その中で連日、事件をもたらした原因について論評が行なわれている。しかしそれは必ずしも満足すべきものとはいえない。中学校教師の体罰、現在の学校教育全般、親子関係、家族のあり方、ホラービデオや猟奇的なマンガなどのバーチャルな世界、殺人を快楽と感ずる精神病質等、さまざまな原因が取り上げられているが、それらの説明はどれもが一元的な解説であり、錯綜した状況をあまりに紋切り型にとらえすぎている。

また、この事件が個人の異常性に帰せられるのか、現在の社会状況の必然として起きたのかにつ

いても論議がかみ合っていない。この事件の原因を、単に一少年の精神病質によるものとし、学校教育などの背景は無視してもよいとする立場が、「異常性」寄りの最たる議論である。しかし、事件以後、マスコミ各社に「うちの子は大丈夫なのか」といった親からの心配が数多く寄せられていることから、この事件が多くの人々にとって、無意識的なレベルで時代の必然と認知されていることがうかがえる。

他方で、この事件は現在の学校教育が生み出したとか、親子関係が問題だとか、ホラービデオの影響だとか、一つの原因がもたらしたかのように断言し、すぐさまそれらを糾弾しはじめる立場もまたステレオタイプのものである。

そこには、事件が起こるとすぐに「悪者」を探しだし、それを糾弾するという、ジャーナリズムの旧態依然とした構造がある。しかし、そのような「悪者探し」から得られるものは少ない。中学校の環境が望ましいものでなかったにしても、なぜそのような学校環境が生み出されるのか、もし少年に体罰を与えた教師がいるとしても、なぜ多くの教師が体罰を与え続けるのかが問題にされなければならぬ。家庭の崩壊、親子関係の歪みに関してもしかり、ホラービデオに関しても同様である。

ぼくは「癒し」について研究してきているが、その観点からすると、現在のジャーナリズムは「癒し」パラダイムではなく、「治療」パラダイムに則っているといえる。西洋医学に代表される「治療」とは、体の悪い部分を見つけたし、投薬や手術などでその部分の器質的な機能的な障害を取り除くことをいう。しかし、それは必ずしも「癒し」にはならない。人間関係の歪みや、組